

学校名	日田市立東部中学校
-----	-----------

活動のテーマ	防災への意識を高め、対応力を身に付ける避難時訓練の実施
主な教科領域等	教科領域（ 特別活動 ）
活動に参加した児童生徒数	（ 1・2・3 学年 486 人）（複数可）
活動に携わった教員数	33 人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	81 人 【保護者(17)・地域住民(24)・その他（園児(30)・保育職員(10)】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2019年 11月 27日（水）
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂・その他（ ）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

- ①災害で避難した際に考えられる様々な問題について考えるとともに、その解決法等について体験を通して学ぶことにより、生徒の防災への意識を高めさせ、いざというときの対応力を身に付けさせる。
- ②地域社会と連携して取り組むことにより、中学生の参画も含め、各自治会における地域防災への意識や取組の改善に資する。
- ③生徒に将来の地域防災の担い手としての意識を高めさせる。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

13:20～13:35 開会行事（校長講話）

【講演までは全校生徒対象】

13:40～14:40 講演「生き続ける防災」

講師：木ノ下勝也氏（レスキューサポート九州代表）

		食料班								
		準備物 購入(無洗米15Kg、アイラップ5本、ふりかけ8袋、紙皿250枚、割り箸250本) 大鍋8個、落し蓋8個、おたま8個、ふきん、運ぶ用のお盆やバット等								
生徒数	22	22	22	22	23	11	11	15:00	お湯沸かし 食材準備 (250食)	① 大鍋にお湯をかける。 ② 3～4人の6班に分かれ、準備する。 ・ヤクルトの容器で米を摺切り一杯入れる。 ・水を80g(ヤクルトの容器であれば、1杯と白と薄い赤の境目まで入れる。 ・袋の底のどちらかに片寄せて、できるだけ空気を抜いてしっかり結ぶ。
15:00	お湯沸かし 食材準備 (300食)	黒塗リペット ボトル黒袋ボ リタンクによる 温水準備	簡易マンホール トイレづくり	段ボールベッド パイプ椅子ベッド パーテーション 製作	土嚢づくり 土嚢積み	担架による 救助訓練 救護訓練 (AED・簡易三 角巾等)	幼児への対応 遊び場所整備 遊びの工夫	15:10		
15:20								15:30		15:40
15:30	調理	浄水剤による 飲料水づくり	簡易トイレの製作	パーテーション 段ボールスリッパ 新聞紙カップ等 製作	シート及び 水嚢による 土嚢積み	幼児への対応 遊びの工夫 新聞紙カップ で水を飲ませる	担架による 救助訓練 救護訓練 (AED・簡易三 角巾等)	15:40	蒸らし	⑤ 食材を取り出して、置いておく。(蒸らす) ⑥ 鍋等の片づけをする。
15:50	蒸らし							16:00		
16:00	片づけ 配布準備	ペットボトル簡 易シャワーづく り	トイレ用水等 の汲み置き	ペットボトルライ ツナ缶ライト おむつ 製作	パーテーション による会場整備			16:00	配布準備	
16:10								16:30		

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

助成金によるレスキューサポート九州の協力により、訓練の計画段階からアドバイスを受けるとともに、当日は各活動班にも一名ずつのサポート体制をお願いし、生徒の質問等にも対応いただいた。

マニュアルは用意しているが、生徒に考えさせ、試行錯誤させることに重点を置いた。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

毎年、避難訓練等において、教師の指示に従い、決められたマニュアルに沿っていかによやく行動できるかに重点を置いた活動を実施しているが、自ら考えて行動する「自助・共助」の視点からの教育活動の見直しにつながった。

12月の地震及び火災避難訓練においては、教員にも予告なしで実施し、避難経路の選択ミス等がみられたが、このような経験を通しての学びが、「自助・共助」の視点から重要であることが確認できた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。

訓練に参加した生徒の感想には、61%の生徒が、「この経験を災害の際には生かしていきたい」趣旨の内容、その他の生徒については、参加に消極的だった生徒も含め、「参加してよかった」との内容だった。

さらに、「判断をし、一人でも助かるように頑張りたい」「災害の時にきっと役立つと思うし、自分が率先して動かないといけない」など、減災防災活動の主体者としての意識の高まりがみられた。

また、「何かあったときは、中学生ボランティアとして、みんなで協力して避難所の手助けをしていきたい」「お母さんや地域の人にも教えていきたい」など、家庭や地域防災に積極的に関わっていかうとする態度も見受けられた。

③教師や保護者、地域、関係機関等(児童生徒以外)の視点から

保護者からは、「子どもが試行錯誤しながら取り組んでいるのがよい」「この経験は将来役立つ」などの感想、自治会関係者からは、「地域でもこのような訓練は必要だ」「学んだことを地域でも伝えていきたい」などの感想が寄せられた。また、「地域のお年寄、子ども達が避難してくる前の準備が、中学生の力で十分にできるのだと頼もしく感じた」という意見も見受けられた。

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

本校の体育館は実際に地域の指定避難所となっており、避難時において学校施設、備品等の活用については、これまで検討等を行っておらず、避難所としての学校という視点で、例えば「段ボールの保管」や「学校施設設備、備品の利用」等、地域防災の拠点として、学校の役割について考える機会とも考え、マンホールを所管している市役所上下水道局職員や市教育庁職員にも参加いただいた。

また、今後の各自治会での活用も含め訓練の際に生かしていただくために、今回の訓練には全町内から生徒を参加させた。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

①「全員の生徒に体験させてほしい」との意見が多くみられたが、会場や要員等を考えると全校一斉は難しいので、毎年実施し、3年間の中で全員が体験できるように計画する。

②生徒会等の生徒主体の組織が、計画実行していくように手立てを工夫する。